

焼岳の火山活動解説資料（令和7年7月）

気象庁地震火山部
火山監視・警報センター

山頂付近の微小な地震活動が継続しています。GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いています。山頂付近の噴気の状態に変化は認められません。

山頂付近の地震活動や地殻変動に加え、焼岳周辺では数年おきに震度1以上を観測する地震を含む活発な地震活動がみられるなど、中長期的に焼岳の火山活動は高まってきていますので、引き続き今後の火山活動の推移に注意が必要です。

山頂付近を含む想定火口域内では、突発的に火山ガス等が噴出する可能性があります。登山する際は、火山活動の異変に注意するとともに、ヘルメットを着用するなどの安全対策をしてください。また、噴気地帯にはとどまらないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・地震の発生状況（図1-②③、図2、図5-④⑤、図8～10）

山頂付近の微小な地震活動（焼岳山頂付近の概ね海拔0km以浅が震源と推定される地震）が継続しています。

火山性微動は観測されていません。

【山頂付近以外の焼岳周辺の地震活動】

今期間、低調に経過しました。

・噴気など表面現象の状況（図1-①、図3、図4、図5-①～③、図11、図12、図14）

噴気活動に特段の変化はありません。

北陸地方整備局が設置している焼岳北監視カメラ（焼岳の北北西約4km）、焼岳東監視カメラ（焼岳の東南東約2.5km）及び焼岳南西斜面監視カメラ（焼岳の西南西約2.5km）による観測では、北峰付近の噴気、黒谷火口及び岩坪谷上部の噴気の高さは、いずれも100m以下で経過しています。

24日に実施した現地調査では、北峰南斜面や隠居穴火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

・地殻変動の状況（図1-④⑤、図6～8、図13）

GNSS連続観測では、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化が続いています。地震回数増加に対応して2024年5月末頃からその変化率が増加しましたが、2024年7月下旬から鈍化しています。

傾斜計による観測では、火山活動によるとみられる変動は認められません。

現地調査による繰り返し光波測距観測では、2021年以降、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる斜距離のわずかな縮みが認められています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年8月分）は令和7年9月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、北陸地方整備局、国土地理院、京都大学、名古屋大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。

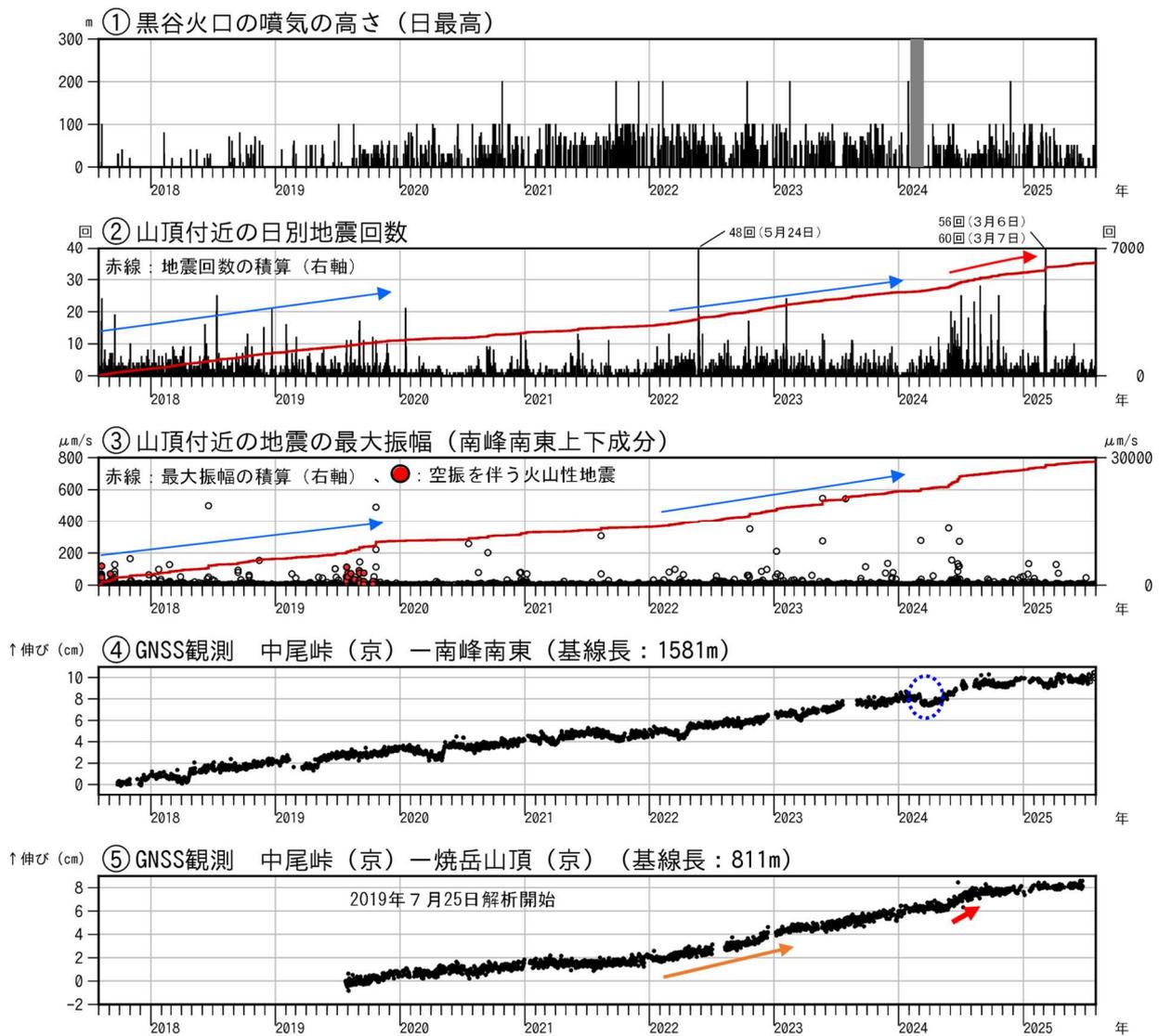


図1 焼岳 火山活動経過図（2017年8月1日～2025年7月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0 \mu\text{m/s}$ 以上、S-P 時間 1.0 秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震のことです。山頂付近の地震については、図2も参照。

- ① 灰色の期間（2024年2月5日～3月14日）は欠測を示します。
- ④⑤は図7の基線⑥⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（京）は京都大学の観測点です。
- ④の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

- ・ 黒谷火口では、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えていました。
- ・ 2022年1月頃から2023年末まで、山頂付近の地震回数に増加傾向がみられましたが、2017年8月から2019年末の期間にみられた地震活動（積算曲線の勾配）とほぼ同程度です（②③青矢印）。また、山頂付近の微小な地震（焼岳山頂付近の概ね海拔 0 km 以浅が震源と推定される地震）が継続しています。2024年5月下旬から2025年3月上旬にかけて、時々短期的な増加がみられました（②赤矢印）。
- ・ 山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています（④⑤）。
- ・ ⑤の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化率がやや大きくなりました（橙矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しましたが、7月下旬からは鈍化しています。

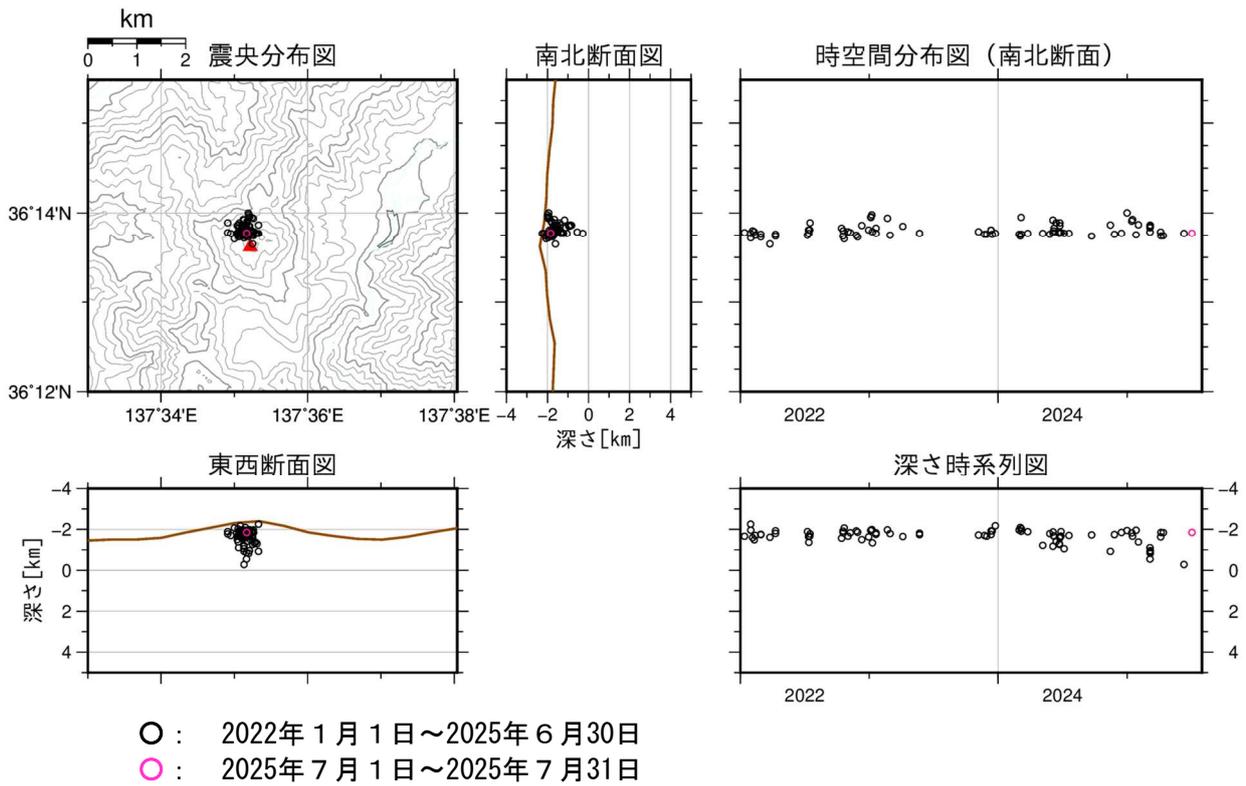


図2 焼岳 山頂付近の地震の震源分布図（2022年1月1日～2025年7月31日）

山頂付近の地震とは、南峰南東観測点の上下動振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.0秒以内で、焼岳山頂付近の概ね海拔0 km以浅が震源と推定される地震のことです。

- ・震源は、山頂付近の深さ0 km（海拔0 km）以浅に分布しています。



図3 焼岳 山頂部及び南西斜面の状況

(上図：焼岳北監視カメラ、下左図：焼岳南西斜面監視カメラ、下右図：焼岳東監視カメラ)
 ・噴気活動に特段の変化はありません。

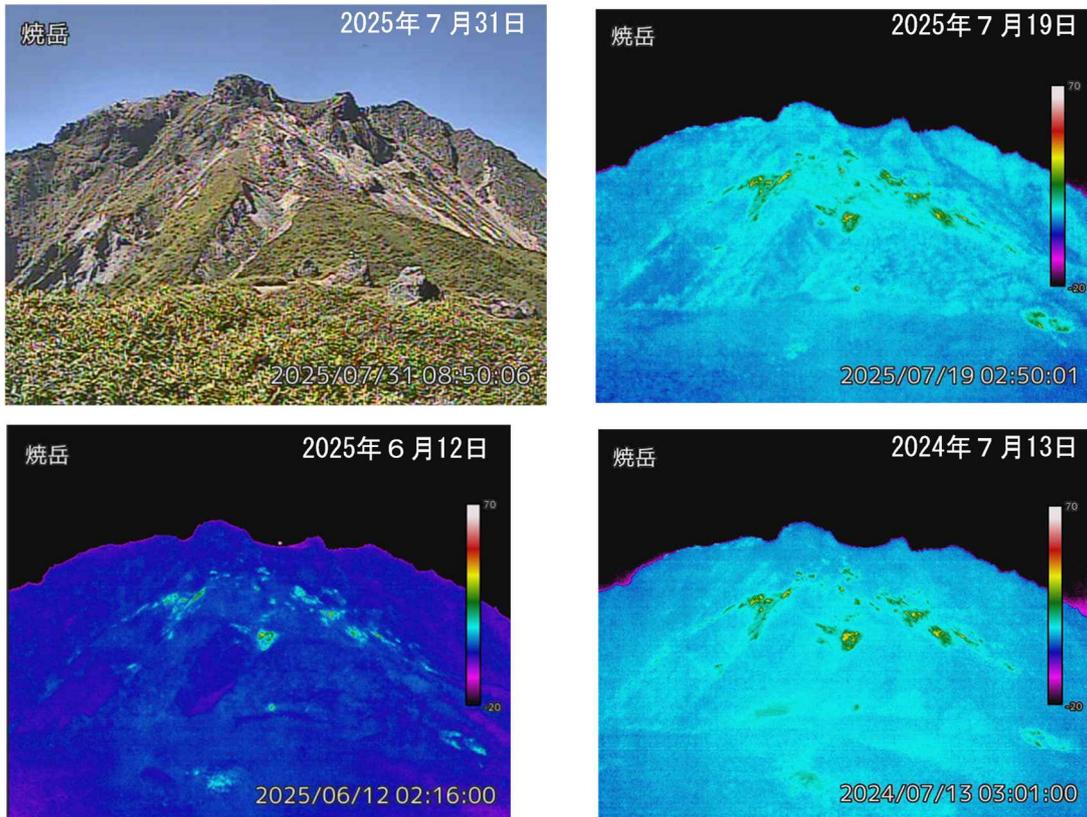


図4 焼岳 中尾峠赤外熱映像カメラによる焼岳の北側斜面の地表面温度分布と可視画像
 撮影場所と撮影方向は図14を参照。

・前月（左下図）及び前年（右下図）と比較して、噴気の状態や地表面温度分布に特段の変化はありません。

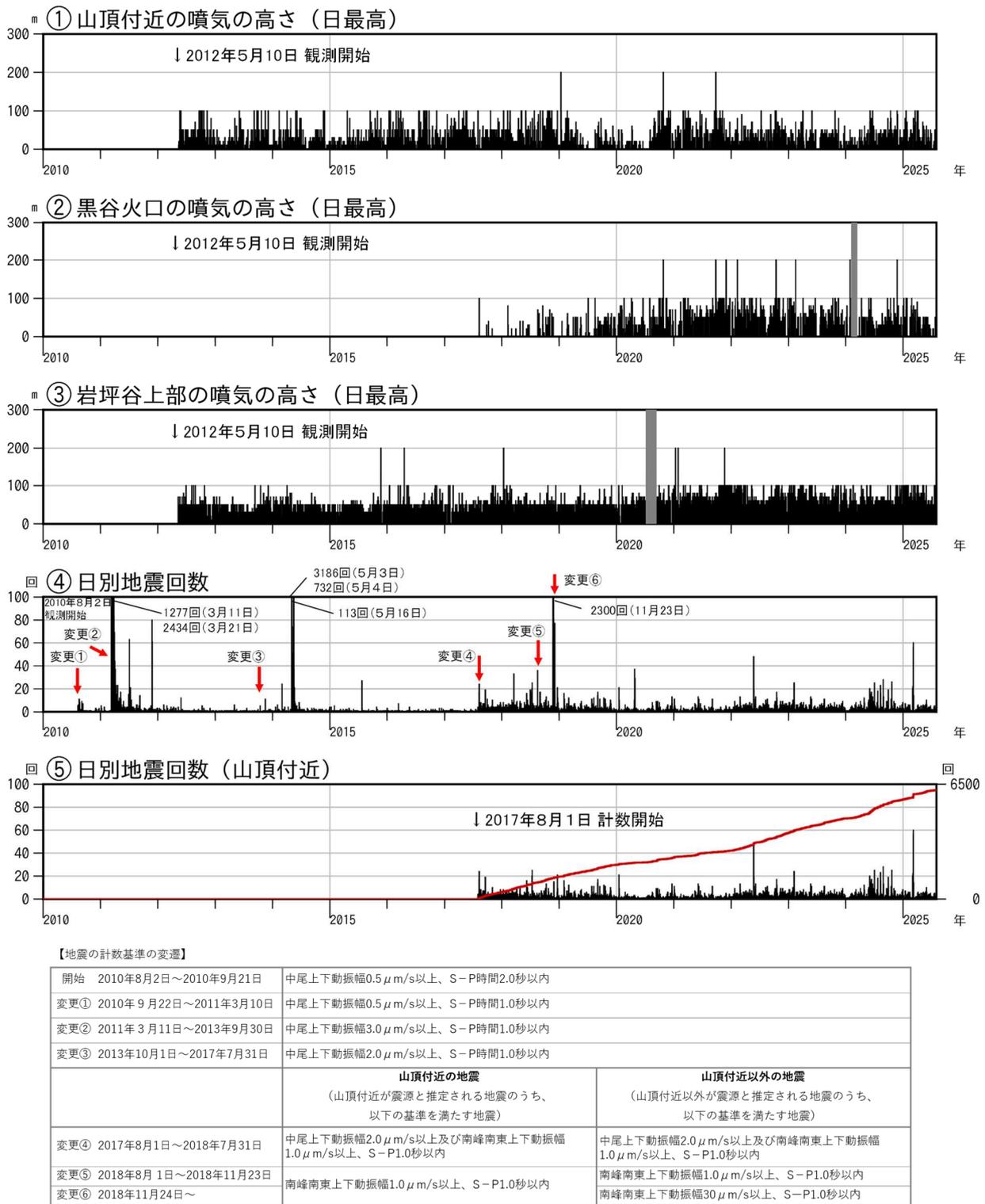


図5 焼岳 噴気の高さと地震回数の推移(2010年8月2日～2025年7月31日)

- ②黒谷火口の噴気の高さは、2024年2月5日から3月14日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ③岩坪谷上部の噴気の高さは、2020年7月7日から9月10日にかけて、障害のため欠測（灰色の期間）。
- ④2017年8月1日以降、山頂付近の地震と山頂付近以外の地震を分けて計数していますが、④ではこれらを合計した回数を示しています。図中の赤矢印は計数基準の変更を示しています。
- ⑤山頂付近の日別地震回数（左軸）と日別地震回数の積算（右軸）を示しています。
- ・黒谷火口では、2017年夏頃から噴気が時々観測されるようになり、2019年夏頃から噴気を観測する日が増えました。

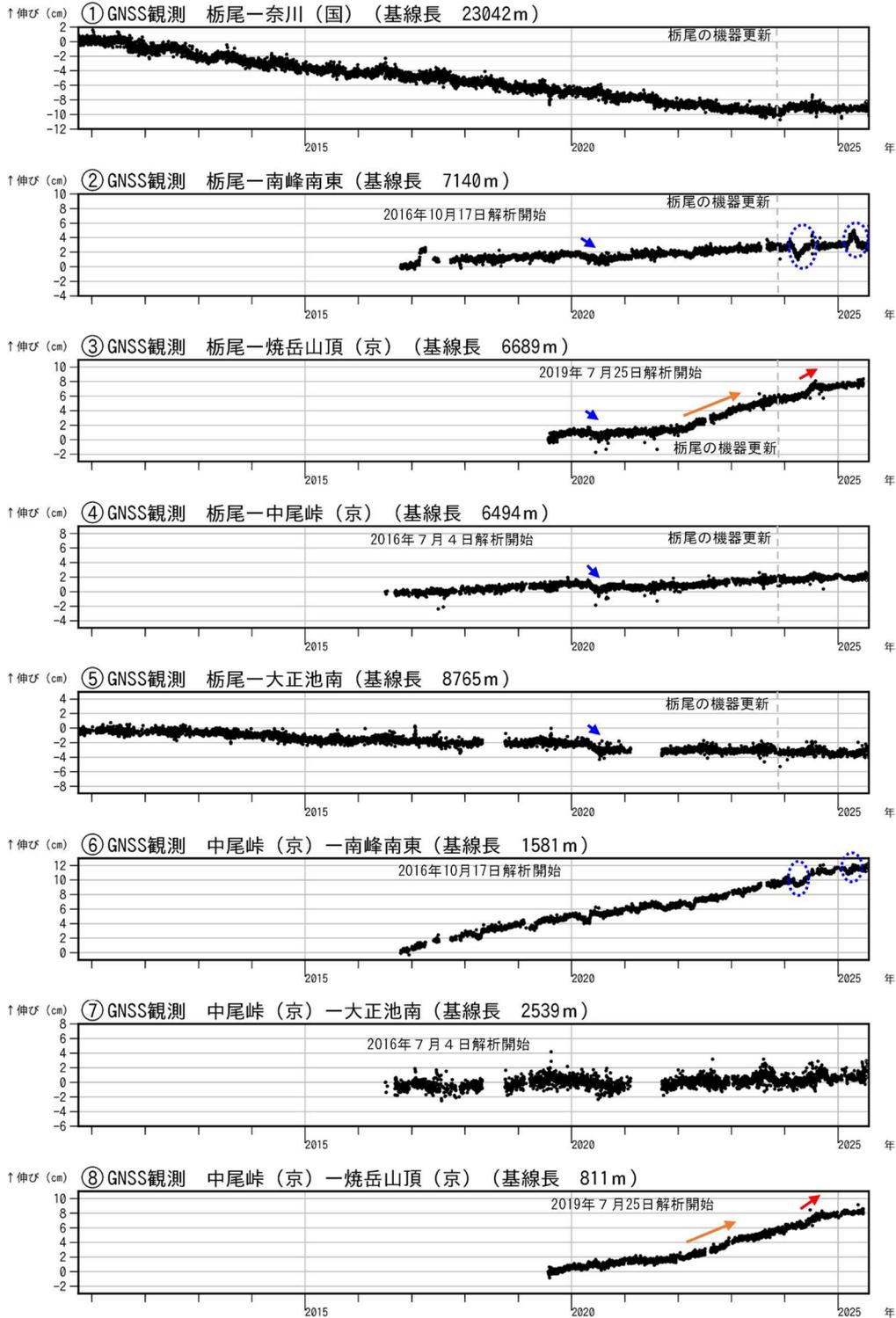


図6 焼岳 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月1日～2025年7月31日）

- ・⑥と⑧の基線では、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられる伸びの変化が継続しています。
- ・③と⑧の基線では、2022年1月頃から2023年2月頃にかけて焼岳山頂（京）観測点の南東進と隆起による伸びの変化がみられました（橙矢印）。また、山頂付近での緩やかな膨張を示すと考えられる変化は、2024年5月下旬からの地震回数の増加に対応してその変化率が増加しましたが（赤矢印）、7月下旬からは鈍化しています。
- ・②～⑤の基線では、2020年5月下旬頃から7月頃にかけて、2020年4月以降活発化した山頂の東～北東側のやや深いところを震源とする地震活動に関連すると考えられる変動がみられました（青矢印）。

（前ページ 図6の説明）

図7のGNSS基線①～⑧に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。（国）は国土地理院、（京）は京都大学の観測点です。

2023年10月17日の栢尾観測点の機器交換に伴うステップ状の変化を補正しています（①～⑤の灰色点線）。

②⑥の青破線内の変化は、南峰南東観測点の局所的な変動によるものと考えられます。

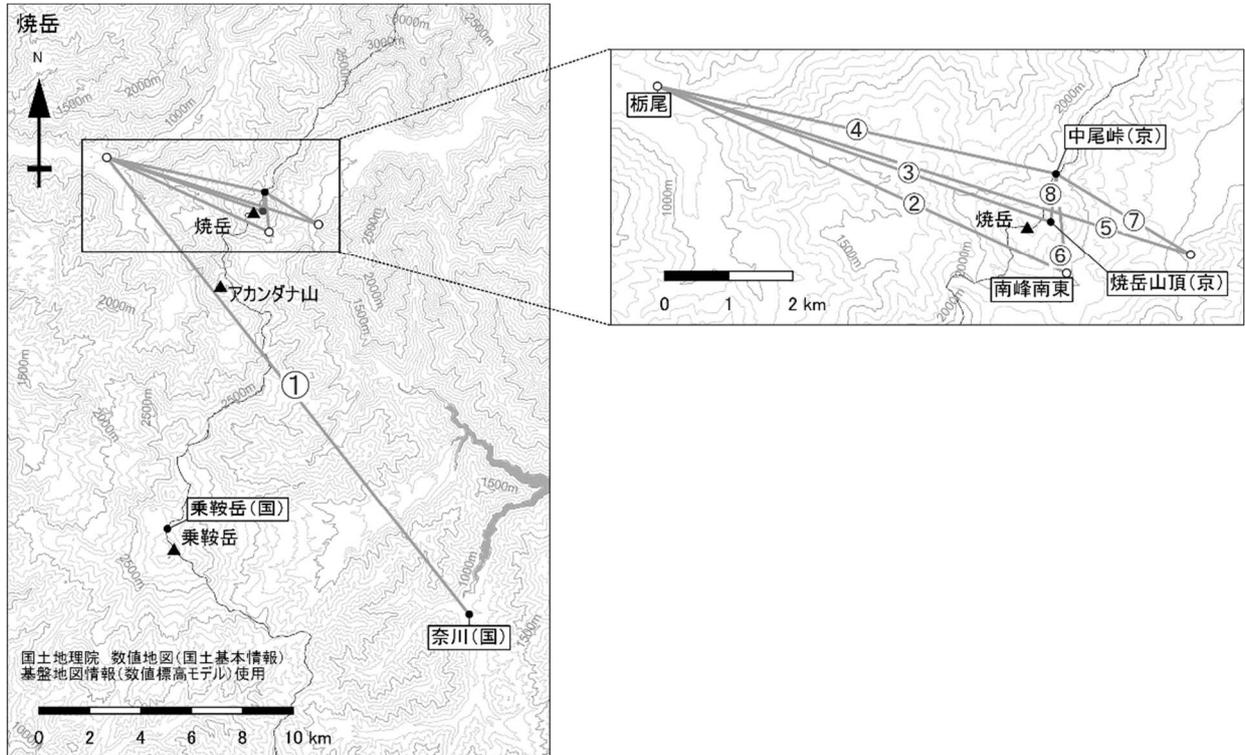


図7 焼岳 GNSS 連続観測点配置

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

①～⑧は図6のGNSS基線①～⑧に対応しています。⑥⑧は図1のGNSS基線④⑤にも対応しています。

（国）：国土地理院、（京）：京都大学

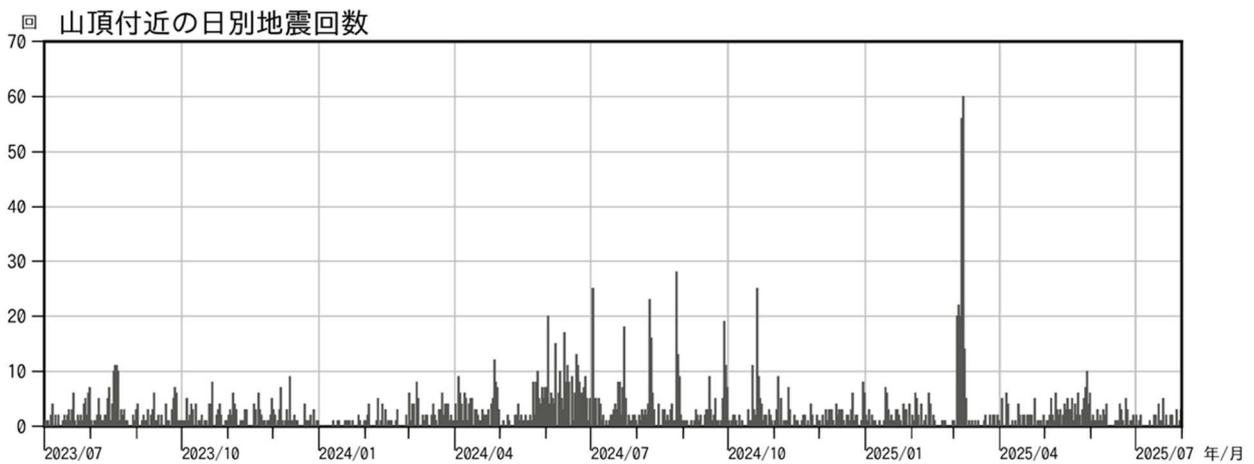
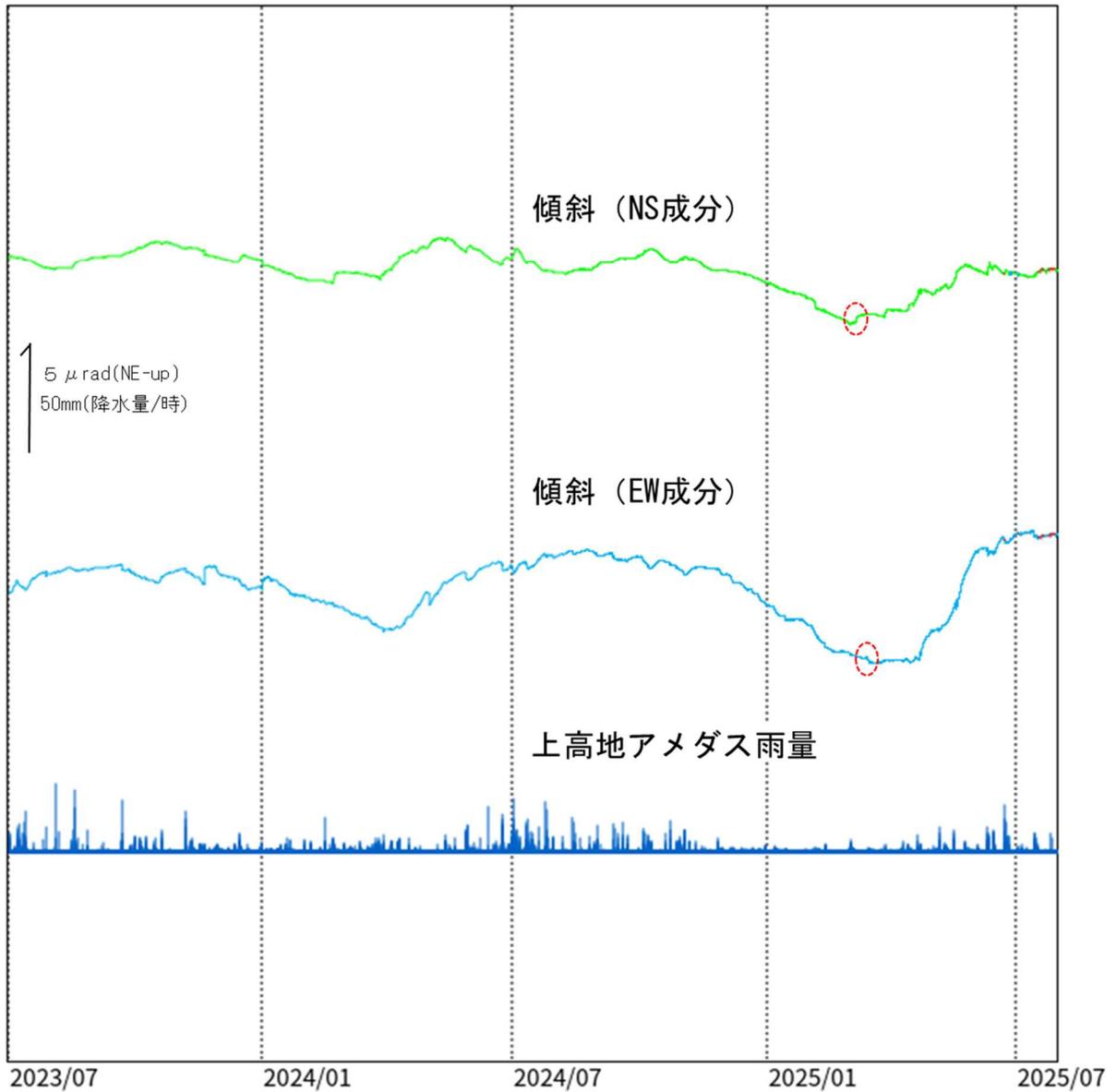


図8 焼岳 南峰南東観測点における傾斜データ（2023年7月1日～2025年7月31日）

- ・傾斜計による観測では、3月8日に発生した山頂方向の隆起を示すわずかな傾斜変動（赤破線）以外は、火山活動によるとみられる変動は認められません。

【焼岳周辺の地震活動】

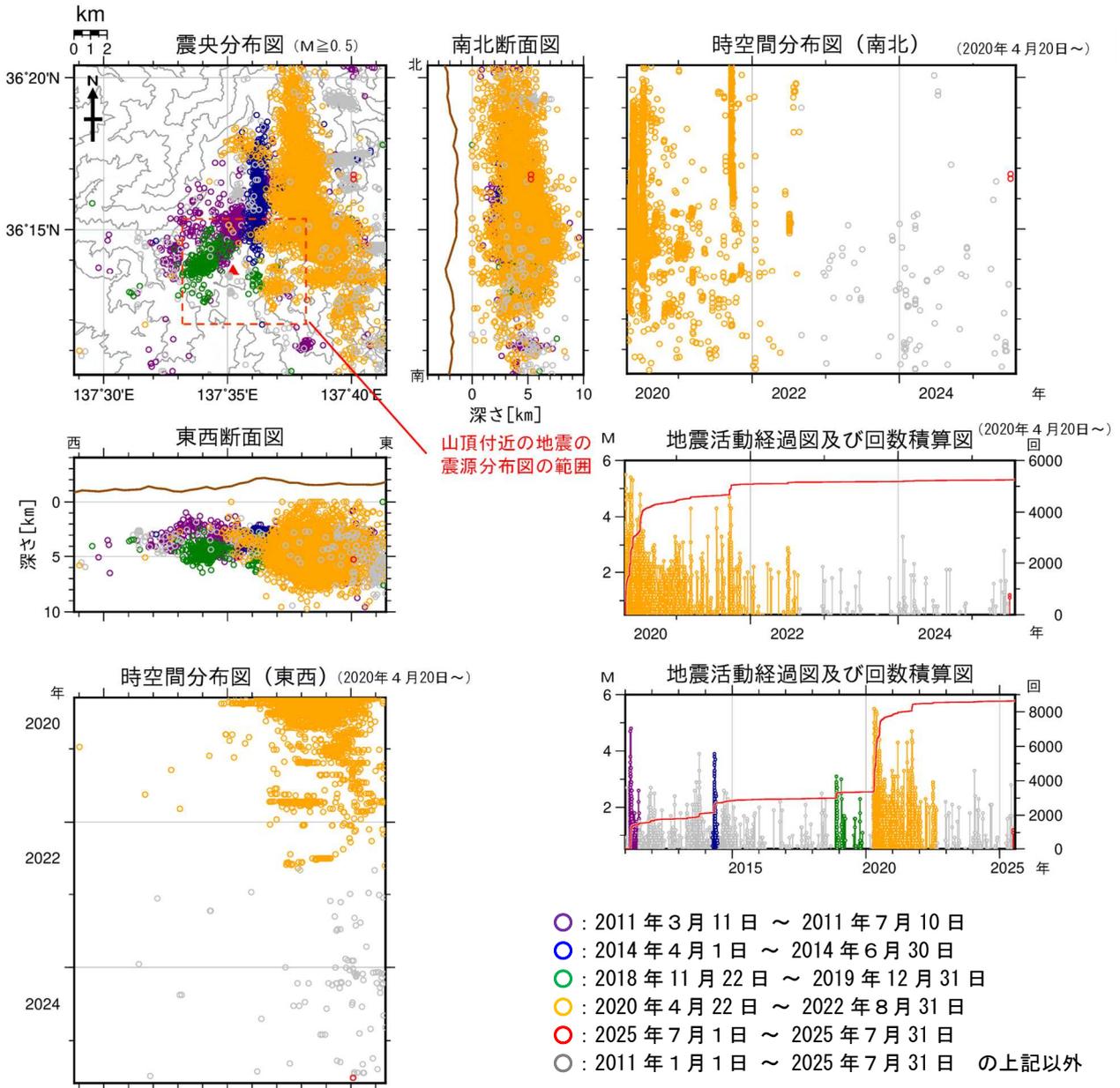


図9 焼岳 広域地震観測網による山体及び周辺の地震活動(2011年1月1日～2025年7月31日)

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

地震活動経過図及び回数積算図の赤線は積算回数（右軸）を示しています。

震央分布図中の赤破線領域は、図2で示す領域に対応しています。

- ・ 焼岳周辺では、2011年（紫丸）、2014年（青丸）、2018年から2019年にかけて（緑丸）、2020年4月から2022年8月にかけて（橙丸）、地震活動の活発化がみられました。
- ・ 今期間（赤丸）、震源が求まる焼岳周辺の地震活動は低調に経過しました。

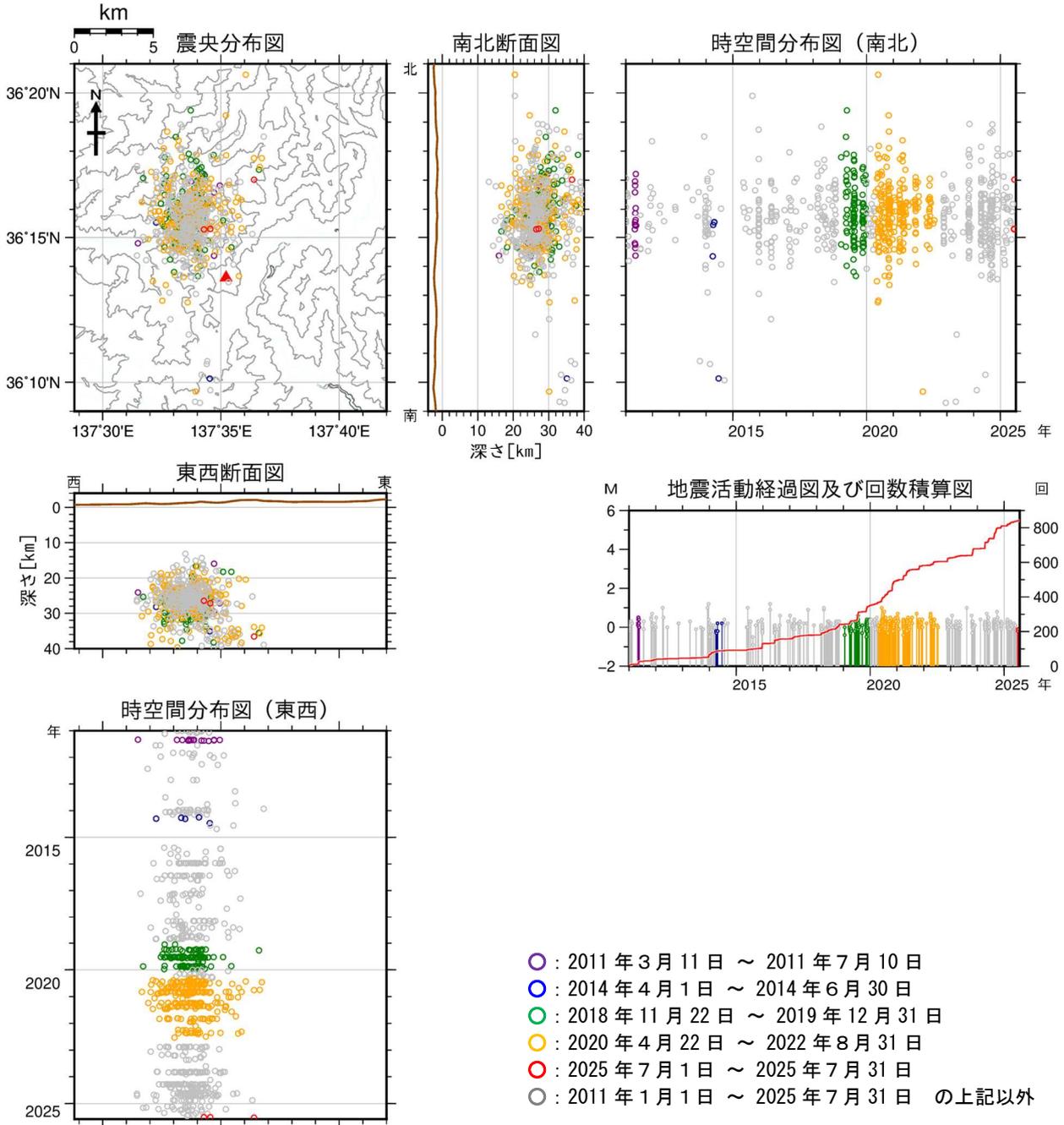


図10 焼岳 広域地震観測網による深部低周波地震の震源分布図（2011年1月1日～2025年7月31日）

広域地震観測網により震源決定したもので、深さは全て海面以下として決定しています。なお、2020年9月以降については、地震観測点の標高を考慮する等、震源決定の手法を変更しています。

M（マグニチュード）は地震の規模を表します。

図中の震源要素は一部暫定値が含まれており、後日変更することがあります。

- ・ 焼岳の北西側の深い所を震源とする低周波地震の発生状況に特段の変化はみられません。
- ・ 過去には、図9に示したような焼岳周辺の地震活動の活発化がみられた期間付近で、深部低周波地震が増加したことがあります。

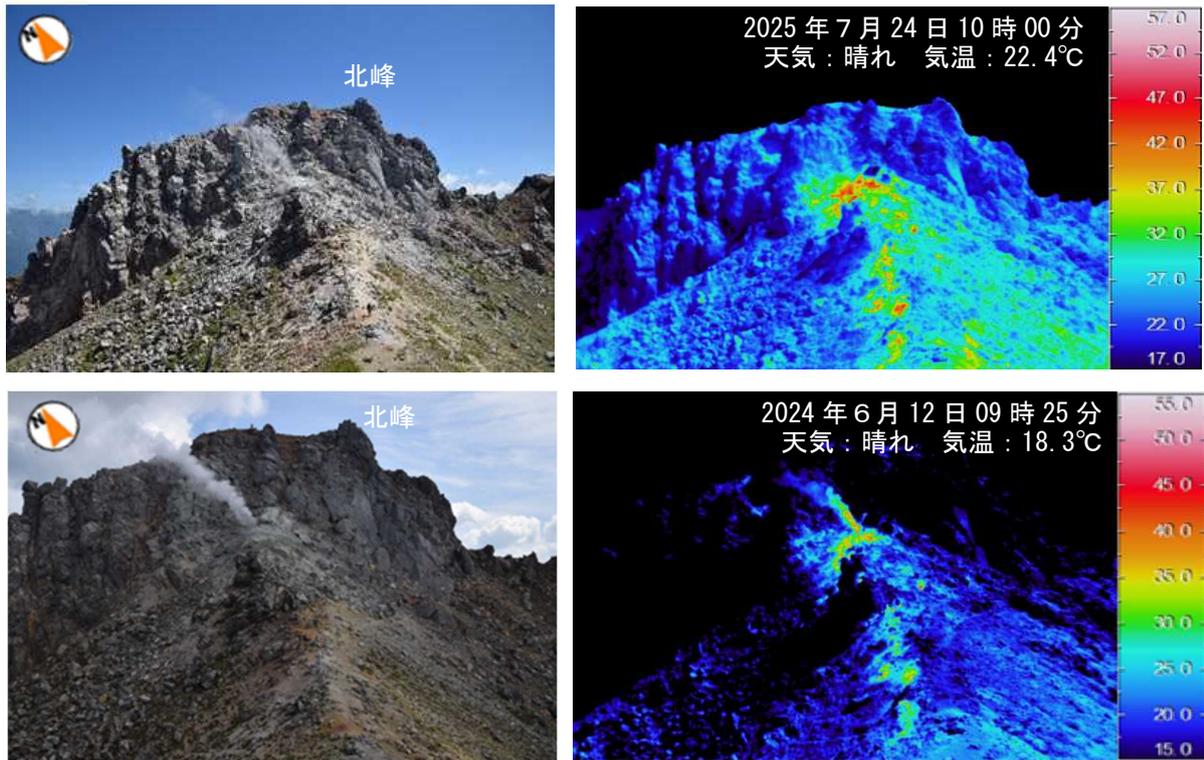


図 11-1 焼岳 北峰南斜面の地表面温度分布

・北峰南斜面ではこれまでの観測と同様に地熱域が認められましたが、前回の観測（2024年6月）と比較して、日射の影響を超える目立った変化はありませんでした。

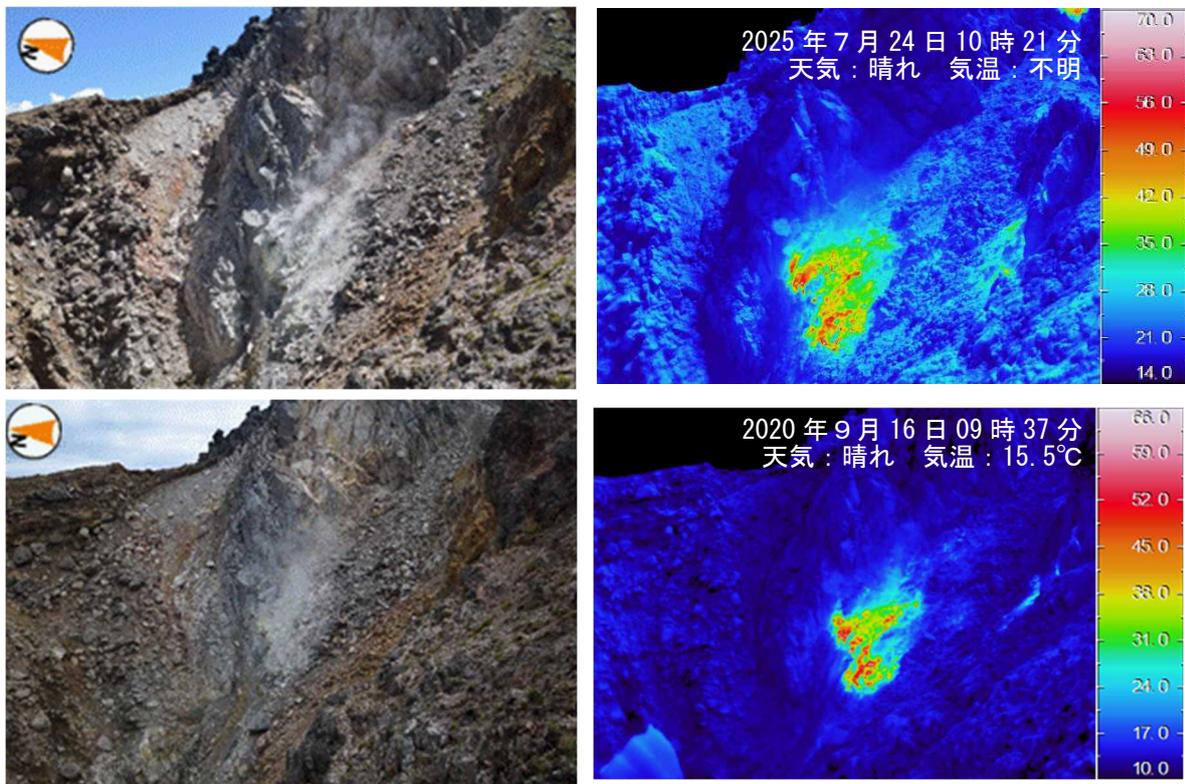


図 11-2 焼岳 隠居穴火口の地表面温度分布

・隠居穴火口では、前回の観測（2020年9月）と同様に噴気活動がみられましたが、噴気や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

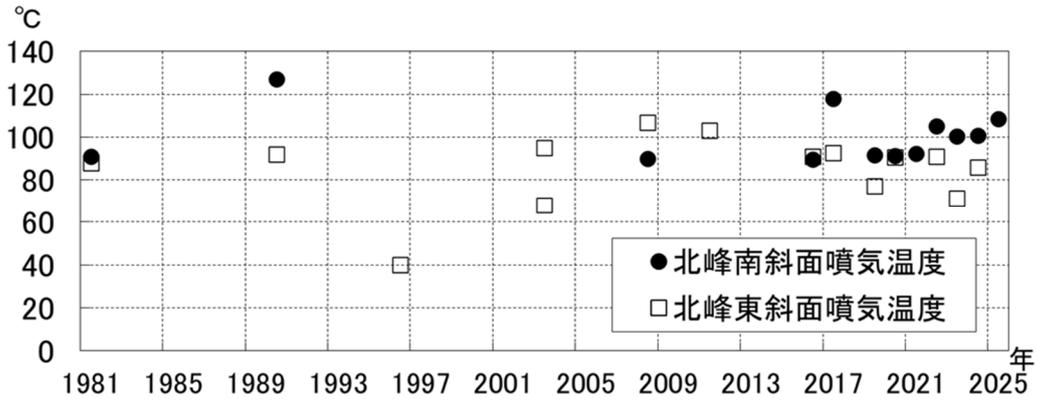


図 12 焼岳 北峰の噴気温度

・北峰南斜面の噴気温度は前回（2024年6月）の観測よりやや上昇していましたが、大きな変化は認められませんでした。

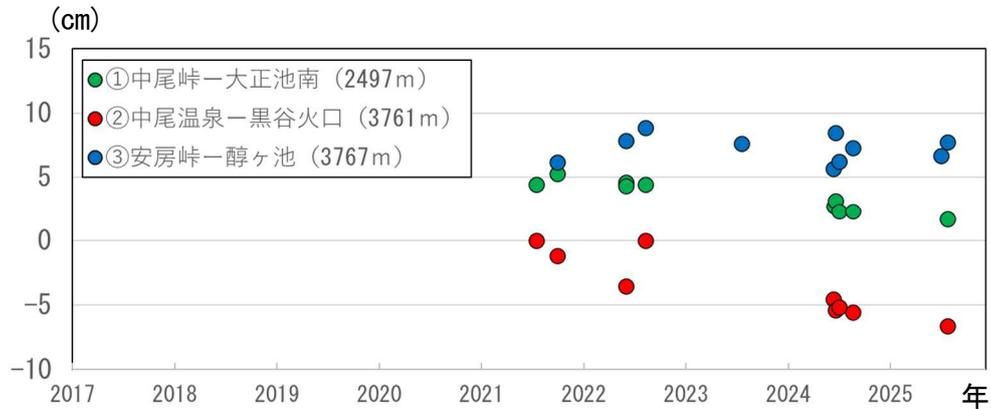


図 13-1 焼岳 繰り返し光波測距観測結果

・①及び②の基線では、2021年以降、山頂付近の緩やかな膨張を示すと考えられるわずかな斜距離の縮みが認められています。

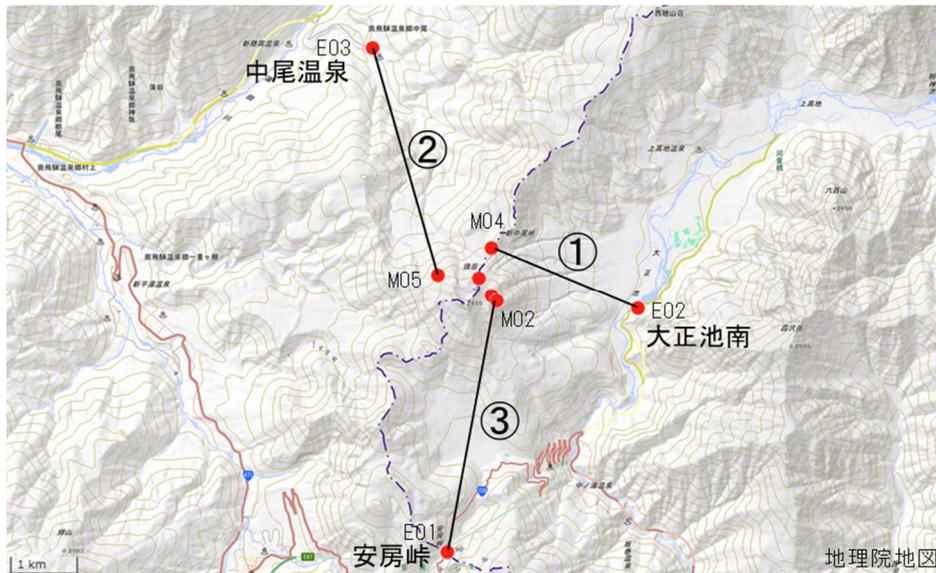
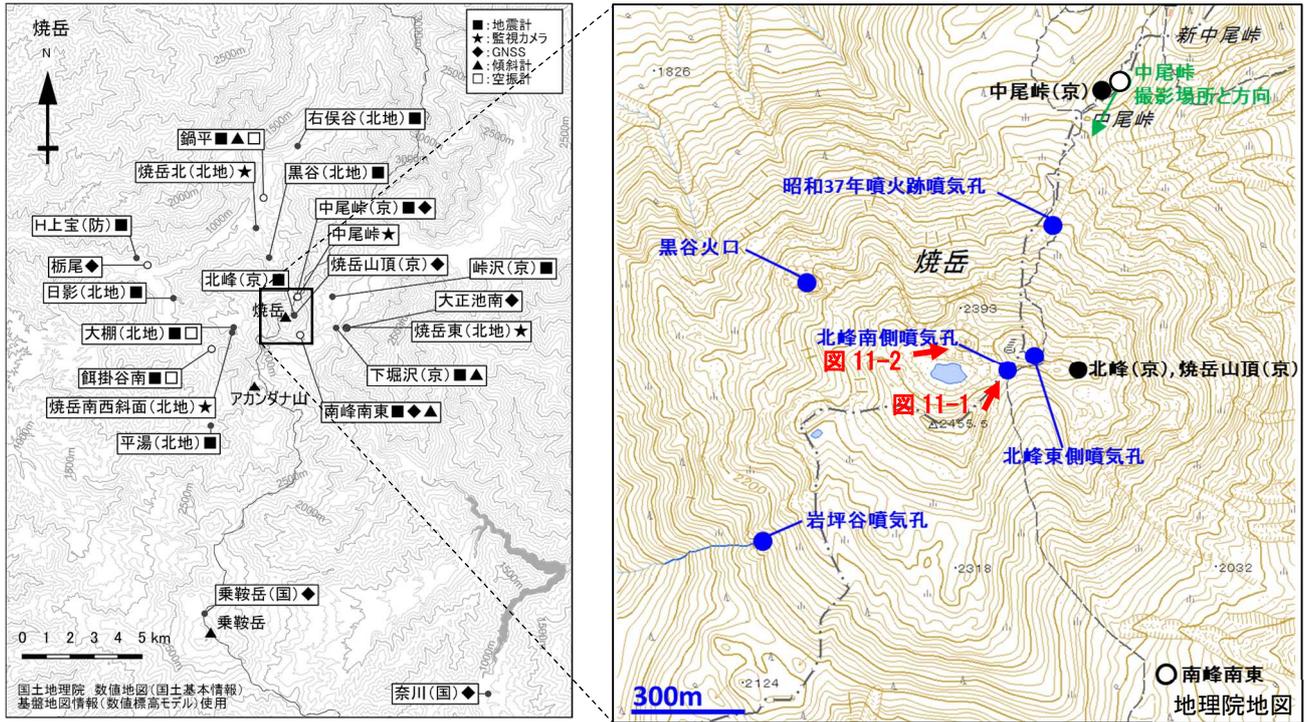


図 13-2 焼岳 繰り返し光波測距観測点及び基線図

図の番号は図 13-1 に対応しています。赤丸は器械点またはミラー点を示します。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

○は気象庁、●は気象庁以外の機関の観測点を示しています。
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(京): 京都大学、(北地): 北陸地方整備局

図 14 焼岳 観測点配置及び噴気孔位置

右図中の緑矢印は図 4 の撮影位置と方向、赤矢印は図 11 の撮影位置と方向を示します。